

「児童理解に基づく生徒指導」

三田市立高平小学校
教諭 藤原 伸二

1. 取組の内容・方法

(1) はじめに

私が初めて生徒指導担当者になったのは、ちょうど10年前である。それから本校で3校目になるが、学級担任をしながら生徒指導担当を続けている。今回大変名誉な賞をいただいたが、これは私個人の賞ではなくこの間「子どもたちが生き生きと活動する学校にしよう」とともに取り組んだたくさんの仲間の教職員の代表としていただいたと考えている。特別な活動をしたのではなく「あたりまえのことをあたりまえ」に取り組んだだけであるが、この機会に日々の教育活動で大切に考えてきたことを紹介したい。

(2) 日々の教育活動の中で

・日常の中でのこだわり

日常の中でこだわっていることはたくさんある。まず朝の挨拶だ。子どもたちは、毎朝学校にやってくる。当たり前のことだが、その心の中は様々な感情が渦巻いている。楽しみでやってくる子もいれば不安を抱えている子もいる。そんな中で、教師は元気な姿で子どもに接していきたいと考え、朝の挨拶を大切にしている。こちらが元気よく挨拶をすることで少しでも元気を分けられればと思う。また、子どもたちにも自分から元気よく挨拶をしていこうと伝える。中学年までは元気な反応が返ってくる。高学年は難しいことが多いが根気強く続けている。もう一つ朝一番にすることは、みんながそろっていることがうれしいことを伝えることだ。欠席していた子どもが戻ってきたら朝の会で大きな拍手を送る。「ここにいることがうれしいことなんだ」と伝えたいからだ。本当に小さなことだがこんな小さなことから「挨拶は大切だ」「一人一人が大切だ」というメッセージを送り続けてきた。これは私のこだわりだが、教師一人一人が、それぞれのこだわりを持って子どもと接していくことが大切だ。そして、そのこだわりを様々な機会に交流し合うことで、校内でまた新しいものが生まれると考えてきた。

・授業の中で

生徒指導の原点は、日々の教育活動であり、その日々の教育活動の中で重要な部分を占めるのが授業である。日々の授業が充実していれば児童が生き生きと学校生活を過ごせる。授業においては、その教科の内容を理解させていくことはもちろんだが、児童相互の人間関係を育てていくことも重要な要素である。教師は、日々様々な方法を駆使し授業に取り組むが四苦八苦しているのが現状である。そこで、私たちが大切にしてきたことは、お互いの授業を見せ合い(クラスの児童の姿を見せ合い)議論し、改善することである。毎日接している自分の学校の児童が、授業の中で生き生きと活動する姿を見て、そこに至るまでの取り

写真1 阪神地区道徳教育研究発表会



組みや声かけを情報交換することで皆が学び、自分の教育活動に取り入れることによって学校全体が変わっていく。また、不適切な学習環境や言動、それにつながると思われるような教師の指導についてもみんなで議論することで、1クラスの1授業の具体的な場面を通して学んだことが学校全体に広がっていく。お互いをよく知っている学校内の教師による学び合いは、児童理解や生徒指導という点からも大変効果的である。

さらに、学校外の様々な立場の人々の意見を聞くことも大切である。私の場合、幸運にもこの数年だけでも、平成25年度「阪神地区道徳教育研究発表会」平成26年度「阪神地区体育科研究発表会」さらに平成27年度「阪神地区図書館教育研究会」とたくさんの方々に授業を見ていただく機会を得た。それぞれの講師の先生方はもちろん、分科会での意見や、参加者アンケートなどを通して、これまで自分のこだわってきたことについてさらに自信を深めることができたり、逆に改善点について気づくことができたりした。授業内容についてはもちろんだが、一人一人の児童に対して配慮しているかどうかという点で参考になる考えをたくさんいただいた。やはり自分の具体的な教育活動を見せて意見をいただくという機会は大変貴重でありこれからも大切にしていきたい。

写真2 写真3 阪神地区体育科研究発表会



・生徒指導担当として

これまでの10年間で3校にわたって生徒指導生活指導の担当をしてきた。勤務した学校は、地域や規模も様々であるがそこで大切にしてきたことを数点あげていく。

まず、1年のはじめにあたってその学校の前年度までの実態や生徒指導上の課題を確実に伝え職員で共有することである。前年度にどのような問題行動がありどのような指導を行ってきたか、改善されつつある問題と課題として残っているものをしっかりと確認して1年間をスタートする。前年度から職員がほとんど変わらないケースもまれにあるが、半数近くあるいは半数以上代わってしまうこともあるので確実に引き継ぎ新年度から足並みのそろった指導をスタートさせるのである。

次に、生活目標についてである。それぞれの学校で生活目標を設定しているが、心がけたのは「目標は少なく、1年間継続する」ことである。特に課題が多い学校や年度については、3～4の目標を設定し年間を通して継続して指導を続けた。生活の基本として「進んであいさつをする」「トイレのスリッパをそろえる」「廊下は右側を歩く」「時間を守る」の4つの目標を設定することが多

かった。

そして、朝会や集会、学級指導などあらゆる機会を通して、担当者だけでなく様々な教師が目標の大切さをそれぞれの方法で伝え、評価していくというスタイルを大切にしました。

最後は、問題行動に対する取り組みである。学校というところは、意見や考えが違う様々な児童が集まって生活している。当然トラブルや問題が起きてくる。「問題が起きるのが問題ではなく、問題を隠すことが問題である」「問題が起これば職員に伝え、みんなで考えていこう」という基本的な考え方で問題行動に取り組んでいった。よく言われる「学校がチームとして取り組む」という考えである。ただチームとして取り組む場合にも、次のような点には注意していった。まず、担任の「立ち位置」である。チームで取り組む場合に、たくさんの教師がかかわることになる。この時、担任が中途半端な立場になることは児童が不安に陥ることになるので避けたい。担任の「立ち位置」は、その問題の中で一番支援を必要とする児童に寄り添うことを原則とした。次に、チームで取り組む場合に担当者が前面に出すぎたり、担当者に任せてしまったりといったことも避けたい。それは、生徒指導担当者が生徒指導加配等の立場で全クラスの児童にかかわっている場合ならいいが、クラス担任をしながら生徒指導を担当しているケースが多い。児童にかかわっていくのは、その児童の事をよく知っているものが適任だ。そこで「担当者まかせにせず担当者を中心とした取組」を心掛けた。具体的には、学年での問題は、学年の生徒指導担当を中心に対応し、学年がまたがる問題については生徒指導担当者を中心に対応するという原則である。もちろん、学年での問題についても、臨機応変な対応を求められる場合もあるので担当者は待機しておくことは忘れなかった。

(3) 阪神地区生徒指導連絡協議会の活動を通して

平成24年度から平成27年度まで三田市の代表幹事として阪神地区公立小学校生徒指導連絡協議会に参加した。阪神地区公立小学校生徒指導連絡協議会は、「阪神地区公立小学校の生徒指導の充実と強化を図るため、相互の連絡協調に努め、児童の健全な育成を期すること」を目的に1972年に発足し、行政区の改正に伴って三田市も平成13年度から参加している。ここでは、毎月役員会を開催し阪神地区各市町の生徒指導の現状を報告し合ったり、問題行動や不登校など生徒指導上の様々な問題について事例検討を行ったりしている。

さらに、視察研修や講演会を企画し阪神地区の小学校生徒指導担当者の資質向上を目指した活動を実施している。4年間役員を務めたが、平成26年度には、三田市が担当市となっていたため庶務として年間計画や会場準備、研修計画の作成、役員会の運営等にもかかわり、学校内外の様々な視点から生徒指導を考えることができた。

図1 阪神地区公立小学校生徒指導連絡協議会

阪神地区公立小学校生徒指導連絡協議会	
○事業内容	連絡協議会の開催 生徒指導に関する研究と調査 関係図書・分書等による広報活動 関係諸団体との連携
○役員	(理事) 阪神地区各市町担当 校長 (幹事) 阪神地区各市町担当 生徒指導担当者 阪神教育事務所 阪神地区各市町教育委員会 担当指導主事 ☆理事の中から会長、副会長を選出 ☆幹事の中から庶務、会計を選出

2. 取組の成果

(1) 教師の学び合いを通して

校内で授業（児童の姿）を見せ合い、児童の姿や目指すべき児童像を語り合うことや様々な教師が一緒になって問題行動に取り組んだことが、お互いの信頼感を増し、学校がチームとして機能する第一歩となっていたと思う。そして、一人一人の教師の児童に対する見方が変わるきっかけにもなったと思う。私自身も、たくさんの先生方からいろいろなことを学ぶことができた。

(2) 阪神地区公立小学校生徒指導連絡協議会を通して

4年間役員を務める中で、阪神地区の様々な事例を知り一緒に考えることができたことは、自校の生徒指導を進めるうえで有意義であった。市内だけでなく阪神地域という大きな枠組みで情報交換をしていくことは重要なことだと考える。また、阪神地区公立小学校生徒指導連絡協議会の運営の手法が市内の担当者会の運営方法にも生かされていった。市内の担当者会においても、事例検討による研修をその活動に組み入れるなど有意義な活動が増えていった。

3. 課題及び今後の取組の方向

学校は日々変わっている。児童も、教職員も入れ替わっていく。「過去によく似たケースがあったのでこう対応すればよいのでは」と過去の経験から考えていくことは一つの方法であるがそれに頼りすぎてはいけないと思う。よく似ていても児童一人一人みんな違うので、児童の姿をよく見て考えるということをおぼろげに忘れないと思う。これからも、学校のこれまでの取組を伝え引継いでいながら、新しい考えやアイデアを取り入れる柔軟な姿勢を持って、「子どもたちが生き生きと活動する」学校づくりをめざしたい。

